

鈴木 堅弘

◆競争的資金等の研究課題の採択

- * 2025.2.28 2025.0401-2028.0331「東北地域の死者祭祀に関する幽霊画の機能研究」(基盤研究 C) 研究代表者・採択

◆著作

- * 2025.3.31 査読論文「蕉風俳諧と「大津絵」—芭蕉の「かるみ」と江戸の戯作文芸との接点について—」『京都精華大学紀要』第 58 号 (2025 年 3 月号) pp. 16-32

◆講演・口頭発表等

- * 2024.9.15『奇異雑談集』研究会「『奇異雑談集』と「菅根山火金の地蔵の事」」(オンライン口頭発表)
 - * 2024.11.23 怪談文芸研究会シンポジウム「鶴屋南北『東海道四谷怪談』の提灯抜けの演出はどこから来たのか?—絵図からよむ〈からくり芸能〉と〈提灯の幽霊〉をつなぐ視点—」(口頭発表)
 - * 2025.2.20 京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター 伝音セミナー「大津絵節の起源と受容について—踊り唄・寄席・読売の歴史的視点から—」(口頭発表)
 - * 2025.3.2 寺社縁起研究会 (関西支部)「『奇異雑談集』と箱根怪談」(オンライン口頭発表)
- ◆対外活動等
- * 大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻非常勤講師「日本文化学講義 I a」、「日本文化学講義 I b」、「日本文化学演習 III a」(2024.04.01-2025.03.31/2024 年度通年)

光平 有希「20 世紀初頭日本における音楽療法実践史」

近年、京城帝国大学 (韓国) や台北帝国大学 (台湾) を含む近代創設の国内外旧帝国大学精神医学講座が主導した音楽療法実践の個別・比較分析に取り組むなか、とりわけ大正期から昭和戦前期には精神疾患と同様に長期療養型疾患である結核、さらには胃腸障害や疼痛など幅広い分野での治療や療養に音楽が用いられていたことが明らかとなった。

2024 年度は症例誌など病院側一次史料や行政文書のほか、同時代の雑誌や新聞記事を中心に史料調査をおこなった。そのうえで、各症例情報をもとにした個別分析と同時代海外事例との比較分析を通じて、1) 近代日本の長期療養型疾患の療養をふくむ治療の一

環として音楽がどのように用いられ、どういった独自性を持っていたのか、2) 複数の医療領域にまたがる近代日本音楽療法実践の形成及び発展過程とは如何なるものなのか、3) これらの音楽療法実践が日本ならびに海外を含めた音楽療法史上でどのような位置づけになるのか、について総合的に考察を深め、論文や口頭発表等で成果発信をおこなった。

◆関連論文・口頭発表

- * 2025. 3. 21 光平有希「近代日本精神医学にみる音楽療法の諸相と連環」松田利彦・陳延媛編『植民地帝国日本とグローバルな知の連環—日本の朝鮮・台湾・満州統治と欧米の知』思文閣出版、pp. 89-114.
- * 2024.9.6 光平有希「日本音楽療法史—歴史的音源でたどる「医療」と「音楽」のあゆみ」公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構主催「けいはんな学研都市 7 大学連携市民公開講座 2024」於：国立国会図書館関西館。
- * 2024.9.28 光平有希「京都癡狂院にみる音・音楽を介在とした治療」日本伝統音楽研究センター「音・音楽と心身との連環」第 1 回研究会、於：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター。
- * 2025.3.27 光平有希「大正～昭和戦前期にみる音楽療法実践史」令和 6 年度伝音セミナー、於：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター。

◆講義

- * 2024.4. ～ 2025.3. 日本伝統音楽演習 f I・II・III・IV

◆競争的獲得資金

- * 2021.4. ～ 2025.3. 研究代表者、科学研究費 (若手研究)、日本学術振興会、旧帝国大学精神医療にみる近代日本音楽療法実践の諸相。
- * 2021.4. ～ 2025.3. 研究分担者 (研究代表者：鈴木晃仁)、科学研究費 (基盤研究 A)、日本学術振興会、20 世紀日本の医療・社会・記録—医療アーカイブズから立ち上がる近代的患者像の探求。

根本 千聡「院政期における「只拍子」の研究」

2024 年度からの新たな研究テーマの一環として、院政期から中世初期ごろにかけての笛の演奏伝承を主に調査している。初年度となる今回は、主要になる笛関連の資料の調査という文献学的研究とともに、笛の装飾音に関する楽理的な試論を提示した。その成果として、10 月に開催された第 14 回日中音楽比較国

際シンポジウムにおいて「古楽譜における笛の装飾音
考証論」を、11月に開催された第75回東洋音楽学
会大会において「中世前期大神氏の笛に関連する資
料」を発表した。両者をベースとし、次年度からの研
究を本格化させてゆく。また、12月の伝音セミナー
では「平安朝の笛吹く女性：“虫めづる姫君”の音楽」
と題し、過去に報告者がまとめた研究成果を元に、院
政期の笛伝承に関する一説を再編成して発表した。

このほか、現在の研究テーマとの直接的なかわり
はないが、5月に開催された令和六年度日本歌謡学会
春季大会「シンポジウム 今様「足柄」をめぐる総合
的研究」にパネリストとして招待された。論考の発表
とともに今様歌の復元考証をおこなった。

◆関連する執筆

- *2024.4 「謡曲のなかの《千秋楽》と《萬歳楽》」、『祝賀
能〈翁〉付〈高砂〉』特別企画：インタビュー&エッセイ
- *2024.12 「『諸調子品撥合譜』所収今様譜の楽理的分析和
復元の試み」、『日本歌謡研究』64、187～196頁

◆講義・講座

- *2024年度 日本伝統音楽演習e I～IV
- *2024.12.19 伝音セミナー「平安朝の笛吹く女性：“虫め
づる姫君”の音楽」

◆学会発表

- *2024.5.18 令和六年度日本歌謡学会春季大会 シンポ
ジウム 今様「足柄」をめぐる総合的研究「院政期におけ
る琵琶譜の機能と役割—〈足柄〉三首の分析から」
- *2024.10.27 第14回日中音楽比較国際シンポジウム「古
楽譜における笛の装飾音考証論」
- *2024.11.17 第75回東洋音楽学会大会「中世前期大神氏
の笛に関連する資料」

上野 正章「①日本伝統音楽における 楽譜への書き込みから見る伝承につい て—民族雅楽と近代謡曲の比較研究 ②日本伝統音楽研究センターにおけ るプロジェクト研究及び共同研究へ の参加」

昨年度に引き続き民俗芸能における雅楽の調査を
行った。大雪のために諏訪神社歳旦祭（尾花沢市・令
和7年1月1日）の調査は断念せざるを得なかった
が、他はほぼ予定通りに遂行することができた。

焦点を当てたのは主に滋賀における民間雅楽であ

る。湖東地域を中心に近代初期以前から伝承してい
る、あるいはつい近年まで伝承していた演奏団体を調
査した。個々の団体に関して映像と録音による記録を
作成し、楽団のメンバーにインタビューを試みた。民
間雅楽は地域に根差した民俗芸能であり、長い歴史を
持つものも散見される一方、実態調査は進んでいな
い。ささやかではあるが、基礎資料を積み重ねること
ができた。なお、まだ仮説の段階だが、データの蓄積
から徐々に見えてきたのは、民間雅楽における伝承の
メカニズムである。学校教育における日本伝統音楽の
拡充やYouTube動画の普及、専門家による教育・普
及活動など古典音楽を取り巻く環境は激変しつつあ
るが、活動している団体は、これら新しい動向に敏感
で、意欲的に雅楽に取り組む若手の人々を巧みに旧来
の雅楽の演奏実践に組み込んでいこうに見受けられ
た。別の観点から見ると、積極的に変化を受け入れて
いるように見受けられた。その他、本年度は、成果
の中間報告も試みた。田鍬智志氏を中心となって伝音
セミナーを企画し、メンバーが分担して事例報告を試
みた。上野は五百井神社の涼みの湯（湯立て神事）に
おける演奏実践を報告した。

『うたひ鏡』

本年はプロジェクトの最終年度であり、メンバー全
員が総力を挙げて執筆・編集に取り組み、調査報告書
（『うたひ鏡—翻刻・現代語訳・解説 日本伝統音楽研
究センター研究報告15』）を出版した。上野は、「第
二条 声のつかひ様の事 付、出声散の方」、「第六条
乱曲の論」、「第十七条 長く云ふまじき字」、「第
十九条 声枕の事」を分担執筆し、編者として後書き
を担当した。難解な内容や十分とは言えない背景知識
ゆえにまだまだ論じ足りない箇所もあるが、音楽美学
の即興や演奏に関する議論を援用して17世紀の謡曲
実践を考察することができた。今後論文の形に発展さ
せたいと考えている。なお、成果公開は書物とイン
ターネットを通じた公開という二つの方向による。

雅楽と謡曲の比較研究

謡曲は20世紀前半に家による謡い方の多様性が均
質化されていった一方、調査を通じて民間雅楽におい

ではまさに現在、演奏の多様性が失われつつあるという見通しを持った。より一層の資料収集を通じてこれを検証したい。

◆編著

* 2024.2 上野正章・高橋 葉子・田草川みずき・長田あかね・藤田隆則共編『うたひ鏡―翻刻・現代語訳・解説 日本伝統音楽研究センター研究報告 15』

◆発表

* 2024.8.24 令和6年度前期第3回伝音セミナー「地方に根付いた雅楽のありよう―伝承の分化と音楽スタイルの進化―」

◆民俗芸能調査

- * 2024.4.8 丸三ハシモト株式会社見学、春日神社例祭調査（宇根雅楽会・滋賀県長浜市）
- * 2024.4.14 山王祭調査（日吉大社・滋賀県大津市）
- * 2024.5.12 練供養（二十五菩薩来迎会）（得生寺・和歌山県有田市）
- * 2024.7.15 湯立て神事（涼みの湯）（五百井神社・滋賀県栗東市）
- * 2024.8.16 千燈祭（和田神社・滋賀県大津市）
- * 2024.9.1 八朔大祭（伊豆神社・滋賀県大津市）
- * 2024.9.22 新穀の湯（五百井神社・滋賀県栗東市）
- * 2024.11.10 第49回栗東市文化祭（栗東芸術文化会館さきら・滋賀県栗東市）
- * 2024.11.17 「清流の国ぎふ」文化祭2024 知・創・伝文化芸能フェスティバル ギフ雅楽合同演奏会（本巢市民文化ホール・本巢市）
- * 2024.11.23 新嘗祭（豊満神社・滋賀県愛荘町）
- * 2025.3.8 尾花沢雅楽演奏会（芭蕉清風歴史資料館特別展「尾花沢のおひなさま」・山形県尾花沢市）

◆資料調査

- * 2024.8.16 滋賀県立図書館調査
- * 2025.3.7 山形県立図書館調査

遠藤 美奈「在外琉球関連楽器群に関する研究」

本年度は、在外琉球関連楽器の所在と保存状態の確認及び国内現存楽器との関連について調査を行った。

まず、ドイツ・グラッシー楽器博物館にて、アレックス・サンドロ・クラウス著『La Musique au Japon』所載の楽器群（写真挿絵）をもとに、同博物館内アレックス・サンドロ・クラウスコレクションの琉球由来の楽器と見られる楽器群を熟覧調査した。その中には、所在不明や状態の悪い楽器が含まれていたが、クラウスが著書内に「琉球」由来の楽器と著した2点（Kaotari、Seounofowye）のうち1点を確認することができ

た。また、巻末写真の楽器群を見る限り、琉球の楽器と見られる楽器が複数含まれている可能性があり、そのうち三線類2点のうち1点、御座楽4点のうち3点を確認することができた。調査の結果、それらの中には、諸史料で記録されつつも国内で現存が十分に確認されていない楽器や国内現存楽器と同一と見られるものであることがわかった。

次にそれらの楽器の中から、クラウスが「琉球」由来の楽器とした「Seounofowye」（蕭の笛）について国内外にある類似楽器を調査した。クラウスコレクションの「Seounofowye」は、十二管から成り、左右端に長い管を配して中央へ行くほどに短い管となり、いずれの管の末端から数センチ上にリードが付いているという特徴がある。その形状だけを見れば、中国や朝鮮に伝わる排簫、特に鳳凰簫と同じである。鳳凰簫を所蔵する博物館は、国内に数箇所確認することができたことから、伝音センター所蔵田邊尚雄・秀雄旧蔵の楽器コレクション等で熟覧した。しかし、鳳凰簫と同じ形ではあったが、十二管であることやリードが付くといった類似は見つけられなかった。琉球楽器として、十二管であることは重要で、御座楽楽器群の中で「十二律」と呼ばれる楽器が存在しているからである。この楽器は演奏用の楽器か調律具なのかははっきりとせず、国内に1か所だけ現存を確認されているが公開されていないので、詳細は不明なままである。現在のところ、江戸上りに関する絵巻や文書の挿絵などと「Seounofowye」が極めて類似した形をしていた点をふまえ、少なくとも琉球の楽器である可能性は高いことを指摘しておきたい。ただし、リードの有無はそれら資料からは十分に確認することができないため、引き続き調査を進めていく予定である。

なお、本研究は基盤研究（C）「在外琉球関連資料にみる琉球王国儀礼音楽の研究―御座楽を中心に」（24K03470）によるものである。

◆関連する口頭発表

* 2024年11月「A. クラウスの『La Musique au Japon』に収められた琉球関連楽器について」東洋音楽学会第75回大会（東京学芸大学）

神津 武男「人形浄瑠璃文楽の近世 期上演記録データベースの試用版作 成公開と典拠資料の調査と研究」

本年度の日本伝統音楽研究センター（伝音センターと略す）では、標記の課題に取り組んだ。筆者が研究代表者として2023年度に採択された、科学研究費補助金・基盤研究（C）、研究課題名「人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベースの試用版作成公開と典拠資料の調査と研究」の、二年度に当たる。江戸時代・近世期の「人形浄瑠璃文楽」（義太夫節成立以後の人形芝居）の、真に科学的な通史の完成を目指して、資料整備を進めている。筆者は「浄瑠璃本」（通し本。演劇台本・脚本に相当）、「番付」（ポスター・チラシに相当）の二種の史料について、日本国内および海外で悉皆調査を展開してきた。近年新たに所在を把握した未調査機関を中心に実地踏査して、「浄瑠璃本」「番付」各データベースの充実と精度の向上を目指す。本年度は、次に掲げる機関について新規の資料調査を進めた。〈1〉浄瑠璃本（ノートルダム清心女子大学附属図書館）、〈2〉浄瑠璃番付（東京芸術大学附属図書館・国立文楽劇場・倉田喜弘氏旧蔵資料）。また演劇博物館では近年に増加した浄瑠璃本242点を追加して調査した。

筆者が研究分担者として参画した、科研費・基盤研究（B）、研究課題名「新出コレクション「西村公一文庫」の目録作成と江戸時代の日本伝統音楽の資料学的研究」（研究代表者は竹内有一氏。2020～2023年度）では、2022年11月～2023年5月に三期にわたって当該文庫の浄瑠璃本を紹介する展示を開催した。本誌前号の彙報にも触れた通り、拙稿「〈西村公一文庫紹介展〉「近松半二の浄瑠璃本」全三期の補遺——早稲田大学演劇博物館展示図録『近松半二——奇才の浄瑠璃作者』の誤りを正す——」に当該展示図録を再録して、あわせて図録には触れ切れなかった点をまとめた。なお西村氏の収集はいまも継続中で、2017年度末の時点では527点と数えた（科学研究費補助金・研究活動スタート支援、研究課題名「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に

係る追補的資料研究」16H07120 研究成果報告書）が、2024年度までに寄託された分を含めて、801点と数えるに至った。なお2024年新規収集分には、上記展示および拙稿で白百合女子大学図書館本のみを把握していた『伊賀越乗掛合羽』の「近松半二誌」在名本が含まれる。貴重な史料の二点目が新出した。

伝音センターでは2024年度に芸能史研究家・倉田喜弘氏旧蔵資料をお預かりして、筆者は本年度の委託研究課題「倉田喜弘氏旧蔵 墓碑資料の考証と目録作成」に取り組んだ。遺されたアルバムや写真によって、倉田氏は近世期の芸能者（人形浄瑠璃や歌舞伎、その他）の京都・大阪・東京に所在する墓碑について、昭和38年（1963）10月～翌39年6月の期間に集中して調査していたことが判った。倉田氏の墓碑資料により、撤去や破損によって失われた往時の姿を確認することが出来るので、今後研究資源として活用することを目標に索引化に着手した。筆者はこれまで『義太夫年表 近世篇』記載情報の遡及確認のため2024年12月時点で77箇所の寺院などの墓碑調査を行ってきた。内26箇所は倉田氏の調査に洩れるところであったが、反対に倉田氏の墓碑資料によって28箇所の寺院の所在情報を得ることが出来た。これらにつき追加の調査に着手している。

浄瑠璃本や番付の所在調査の波及的な成果として、拙稿「『曾根崎心中』諸本新考——原初の題は『曾根崎心中』ではなかったことや上演史について——」において、初板未改訂本の内題に基づいて原初のタイトルは『曾根崎心中』であって、通行の表記『曾根崎心中』は同改訂本に初出するものであることを指摘した。かつ原初のタイトルでふりがなをもつ唯一の史料を取り上げて、読みは「そねざきのしんじゅう」であったことを明らかにした。人形浄瑠璃文楽は野沢松之輔改竄の台本を襲用するが、その内容が近松門左衛門の原作と如何に異なるのかを、心中するふたり（お初・徳びやう桑）の死因と死に姿が違ってしまっている点に指摘した。2024年度は近松門左衛門の没年・享保9年（1724）から300年にあたるので、追善の志としたものである。

◆関連する執筆

* (1)「〔西村公一文庫紹介展〕「近松半二の浄瑠璃本」全三期の補遺——早稲田大学演劇博物館展示図録『近松半二——奇才の浄瑠璃作者』の誤りを正す——」(本誌前号、2025年9月所収)、(2)「『曾祢崎心中』諸本新考——原初の題は『曾根崎心中』ではなかったことや上演史について——」(『歴史の里』第28号、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館、2025年3月所収)。

高橋 葉子

科研費研究「音曲伝書の体系的研究」 とプロジェクト研究「祝言の音・声・音楽」

1、科研費研究「音曲伝書の体系的研究」

今年度から開始した科研費研究の成果として、昨年度の能楽学会における口頭発表「観世道見仮託「音曲十五之大事」の資料性—観世宗節筆「十五之次第」との比較を中心に」を一部改訂し、論文「「音曲十五之大事」と「十五之次第」—室町末期音曲伝書再編の一断面」として『能と狂言』(能楽学会)に発表した。同稿では、金春家伝来の「音曲十五之大事」が、観世家にもたらされた際に金春系の用語の削除などの編集を経たことを明らかにし、それが観世家六代大夫観世道見の所為である可能性を提起した。また、この論文で使用した観世文庫蔵の二つの伝書、「〔観世元忠〕筆巻子本音曲伝書」と「音曲十五之次第」を翻刻し、「音曲十五之大事」との対照表を作成した。この対照表は、伝音アーカイブスに昨年度掲載した「謡伝書の具体的理解と体系的把握に向けて—「永正元年観世道見在判伝書」の翻刻データ公開」の補遺として追加掲載した。

2、プロジェクト研究「祝言の音・声・音楽—能楽とその周辺」(代表藤田隆則)

本年度のプロジェクト研究「祝言の音・声・音楽—能楽とその周辺」は、〈翁〉付〈高砂〉の研究と謡伝書講読の二つの部会のもとで進化した。

2024年5月、伝音センターは、本学の移転記念行事の一つとして、開口・風流を伴う本格的な「〈翁〉付〈高砂〉」を企画上演した。この公演に先立ち、本プロジェクトメンバーを中心に行われた特別連続講

座において、報告者は「〈翁〉〈高砂〉の特殊演出」の講座を担当し、能における祝言性の歴史的表現について解説した。公演後には〈高砂〉全曲の総譜作成作業を行っている。この総譜は、上演映像や諸資料とともに次年度に公開される予定である。

2019年度から輪読を進めていた『うたひ鏡』(江戸初期刊)については、全文の翻刻・現代語訳・解説が完成し、『うたひ鏡——翻刻・現代語訳・解説』として出版することができた(2025年2月、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 研究報告15)。「うたひ鏡」は、報告者が科研費研究で扱った「音曲十五之大事」に依拠した部分が多い。この依拠関係に気づいたのは輪読研究の半ばであったが、これにより読解作業は大きく進展した。報告者は同書全三十ヶ条のうち四ヶ条の翻刻・現代語訳・解説を担当したほか、同書全体の解説として「『うたひ鏡』の古説・新説」を執筆した。同稿では、「音曲十五之大事」をはじめとする先行音曲伝書と『うたひ鏡』の内容比較を行い、『うたひ鏡』において先行音曲伝書の記事がどのように踏襲または改変されているかを明らかにし、室町末期から近世にかけての謡伝書の系譜における同書の位置を論じた。

3、以上のほか関連する学外活動として以下のプロジェクトで研究を行った。プロジェクトはいずれも継続中である。①野上記念法政大学能楽研究所 能楽の国際・学際的研究拠点公募型共同研究「洋々集から見る謡の作曲と演出」(代表藤田隆則)。②同上「『闇の夜鶴』を通して江戸中期の謡実態を探る」(代表樹下文隆)。③観世流林喜右衛門家資料調査(代表大谷節子)。④太鼓観世家資料調査(代表三浦裕子)。

◆論文・論考

* 2024.12 「音曲十五之大事」と「十五之次第」—室町末期音曲伝書再編の一断面

『能と狂言』22号、能楽学会

* 2025.2 「『うたひ鏡』の古説・新説」

『うたひ鏡—翻刻・現代語訳・解説』日本伝統音楽研究センター 研究報告15

◆資料翻刻・解説

* 2024.8 観世文庫蔵『音曲十五之次第』と同「十五之次第」

『謡伝書の具体的理解と体系的把握に向けて—「永正元年観世道見在判伝書」の翻刻データ公開」補遺として日本伝

- 統音楽研究センター 伝音アーカイブズ
 * 2025.2 『うたひ鏡—翻刻・現代語訳・解説』（共著）
 日本伝統音楽研究センター 研究報告 15
- ◆講座・解説
 * 2024.5 〈翁〉〈高砂〉の特殊演出
 でんおん連続講座特別編「祝言能〈翁〉付〈高砂〉を考える」後編第 5 回
 日本伝統音楽研究センター
- * 2024.8 FM 能楽堂「囃子を楽しむ」
 NHK「FM 能楽堂」
- ◆助成事業に基づく研究
 * 科学研究費助成事業基盤研究（C）24K03561 研究課題
 「音曲伝書の体系的研究」（研究代表者）

多田 純一「近代日本における西洋音楽受容および国産自動ピアノに関する研究」

研究概要

本研究は科学研究費「ショパン作品の演奏におけるヴァリエーションの選択と即興的表現の研究」(20K00244)に続き、新たに得た科学研究費「モダン楽器のピアノによるショパン作品の演奏表現とその変化」(23K00219)を基盤としつつ、近代日本における西洋音楽受容の考察、とりわけ大正期の国産自動ピアノを調査の対象としている。

主な研究成果として、澤田柳吉（1886-1936）の音楽活動および彼の人物像を明らかにした伝記『日本初のショパン弾き 澤田柳吉』（春秋社）を 2023 年 8 月に出版、9 月に彼が残した SP レコードの復刻版およびピアノ・ロールを録音した CD『澤田柳吉の芸術ピアノ・ロール& SP レコード 日本録音集』（サクラフォン）を出版した。まず、澤田の音楽活動を網羅した人物伝の出版により、ピアニストという職業の成立過程および、明治後期から昭和初期における洋楽受容史の概要を示した。CD では大正期に製作された国産自動ピアノのためのピアノ・ロールについて、学習院アーカイブズ、中森隆利氏、佐々木幸弥氏から資料使用の協力を得て、ピアノ研究家である松原聡氏による再生により、新たにレコーディングした。日本楽器（ヤマハ）は昭和初期に自動ピアノおよびピアノ・ロール製作を終えたこと、資料の劣化により再生すること自体が難しいことなどから、これまで先行研究が見ら

れなかった。しかしながら、再生可能なロールを録音したことにより、大正期にどのようなピアノ・ロールが製作され、そのロールがどのような音楽的内容であったのかの検討が可能となった。今後は、さらに多くのロールの調査を実施し、再生および音源化を目指したい。なお、CD では澤田柳吉が録音・出版した SP レコードを未発表の音源も含めて復刻した。

現地調査としては、10 月 5 日から 15 日にポーランド・ワルシャワにて開催された第 2 回ショパン国際ピリオド楽器コンクールの全日程を調査した。このコンクールの特徴は、ショパンの時代に使用された楽器によって、バッハ、モーツァルト、ショパンとほぼ同時代のポーランド人作曲家、そしてショパンの作品が演奏される点にある。出場者はピリオド楽器奏者だけではなく、ピリオド楽器とモダンのピアノを併用するピアニスト、モダンのピアノをメインとするピリオド楽器の演奏経験が少ないピアニスト、モダンのピアノをメインとしつつ複数年かけてこのピリオド楽器の取り扱いを学んだピアニストの 4 種類に分けられた。第 1 ステージおよび第 2 ステージでは独奏の作品が課題曲であったが、ショパンの時代に行われていた即興的な前奏の付加、再現部における装飾音の付加、ヴァリエーションの選択が数多く行われた。このコンクールにおける演奏表現が、2025 年に開催される第 19 回ショパン国際ピアノ・コンクールの演奏にどのような与える影響を与えるのかを考察する。活動報告（多田純一） 彙報用データ 2024 年度

◆著作活動

- * 2024.06 「ピアノの小品の魅力—自由な発想で—」『モーストリー・クラシック』pp.42～43
- * 2024.08 「第 19 回ショパン国際ピアノコンクール記者会見にて概要発表」『ショパン』p.47
- * 2024.08 共著論文「第 2 回ショパン国際ピリオド楽器コンクールにおける参加者のエディション選択の傾向および第 1 回との比較」『つくば国際短期大学紀要』第 50 輯、pp.27～38（2024 年 8 月 10 日）（科学研究費「モダン楽器のピアノによるショパン作品の演奏表現とその変化」の研究協力者である岡部玲子、武田幸子との共著）（査読付き）
- * 2025.03 書評「宮入恭平，増野亜子，神保夏子，小塩さとみ編著『コンクール文化論——競技としての芸術・表現活動を問う』」日本音楽学会『音楽学』第 70 巻 2 号、pp.126～127（2025 年 3 月 18 日）（査読付き）

◆口述活動

* 2024.0725 ラジオ成田「ピースリー・ミュージック」No.173、ゲスト出演（パーソナリティ：まつのじん、植草ひろみ）、楽曲とトークの記録『ピースリー・ノート』7、pp.59～62に収録（2023年10月9日）

◆調査・取材活動

* 近代日本における西洋音楽受容と演奏様式および形態に関する研究
* 第20回「ショパンと彼のヨーロッパ」音楽祭現地調査（予定：2024年8月17日～9月8日）（急病のため中止）
* 所属学会 日本音楽学会、日本音楽表現学会、日本音楽教育学会、音楽教育史学会

出口 実紀 「『龍笛要録譜』の研究」

採択中の科学研究費補助金・基盤研究（C）「龍笛要録譜の研究」について、中断期間を経て今年度より再開した。中断により実施できていなかった資料調査とその内容精査をおこない、岩瀬文庫、上野学園日本音楽史研究所、九州大学等が所蔵する資料を新たに収集した。今年度はこれら資料の書誌情報の整理に取り組み既に手元にある資料との照合と譜の分類作業まで進める予定であったが、照合・分類作業の完了には至らなかったため次年度も取り組むこととする。

その他、共同研究の活動では昨年度より継続して、和歌山県有田市得生寺で伝承されている雅楽の現地調査を担当した。楽講への聞き取りから講員が代々伝承している楽譜の記譜と奏法の関係が明らかとなり、なかでも笙の「気替え」と呼ばれる息を吸う・吐くを交互におこなう従来の奏法とは異なる奏法が確認でき、得生寺が伝承する雅楽の演奏解明が進んだことは大きな収穫であった。また2024年8月には研究会の中間報告として伝音セミナー「地方に根付いた雅楽のありよう―伝承の分化と音楽スタイルの進化―」を実施し、各研究員が調査した事例の報告をおこない次年度以降の報告書作成に向けて内容共有を図った。

◆関連する執筆

* 2025.3 「The Transmissions of Musician Lineages as Seen in Early Modern Flute Notations: A Case Study of the Oka Family at Tennōji」『Gagaku The Cultural Impact of Japanese Ceremonial Music』pp.167-187

◆関連する研究助成

* 日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究（C）「『龍笛要録譜』の研究」（研究代表者、2021年4月～2026年3月予定）

丹羽 幸江 「室町期の謡の旋律法の研究と能の復曲活動」

1、「金春禅竹の自筆譜に見る語り物音楽としての記譜大系」の研究

2023年度より開始した科学研究の課題「金春禅竹の自筆譜に見る語り物音楽としての記譜大系」の2年目の研究を行った。

金春流の記譜法は観世流などと比べるとこれまでほとんど取りあげられてこなかったため、詳しく金春流の記譜法を調べる必要が出てきた。このため一旦、室町期の禅竹の自筆譜から離れ、江戸中期の金春流謡本、通称『六徳本』まで時代を下った。『六徳本』は、明治期の金春流謡本の底本となる重要な謡本であるとともに、謡本史上初めてツヨ吟・ヨワ吟の種別を記すことで名高い。記譜法の調査・分析によりツヨ吟・ヨワ吟の名称が、息扱いの技法と関連して成立したことを明らかにした。

2、能の復曲〈熱田龍神〉

2024年12月に名古屋能楽堂にて観世流研能会能楽師、加藤眞悟氏の主催する一般社団法人「復曲能を観る会」により初演された〈熱田龍神〉での節付けの復元に協力した。名古屋の熱田神宮所縁の曲である。前年度にクリ・サシ・クセの部分復曲し、素謡での試演が行われていたものを今般全曲の復曲を行った。関西大学所蔵の福王流八百番を底本とし、江戸中～後期の節付けを現代の節付けに復元した。

3、『うたひ鏡』

本学藤田隆則教授の共同研究に参加し、江戸期の謡伝書『うたひ鏡』の担当部分の翻刻・現代語訳を行った。

4、博士論文の執筆と学位申請

博士論文「能の歌唱法 ツヨ吟・ヨワ吟の研究」を東京藝術大学音楽楽部楽理科（主査、塚原康子教授、副査、植村幸生教授、杉本和寛教授、本学藤田隆則教授）に提出した。

◆関連する執筆

- * 上野正章・恵阪悟・高橋葉子・田草川みずき・長田あかね・藤田隆則共編『謡鏡—翻刻・現代語訳・解説』京都市立芸術大学、担当部分「第四条 序破急の事」（pp.55-60）、「第八条 息継ぎの次第」（pp.89-93）、「第十条 しほる曲差別」（pp.107-112）、「第二十七条 謡に節博士付け様」（pp.233-239）。
- * 「能の歌唱法 ツヨ吟・ヨワ吟の研究」東京藝術大学音楽楽部楽理科（博士論文）
- * 「17世紀の能楽金春流六徳本における吟の発声法の確立」昭和音楽大学研究紀要 44号、pp.44-56。

平間 充子「平安時代前期の儀礼と音楽・芸能：日中比較と宮廷内秩序の視点から」

昨年度に引き続き、古代における日中双方の女性演奏家について比較分析を行い、日本の内教坊に所属する女性は中国に比べ政治的地位が高かったこと、また内教坊が日本で整備された時期と朝廷内での女性の地位が低下する時期が一致することを指摘した。所謂船楽に関しても昨年度の成果に補足し、貴族の私邸で持たれた竜頭鷺首について、広大な寝殿造の庭園を背景に、十六夜の月光のみに頼る視覚的効果と、松風や波の音に楽の音が混じるサウンドスケープとが相まって壮大な演出がなされていたこと、および船楽の淵源は中国故事に求められる可能性を指摘した。

また、日本独特の儀礼として、平安時代初期に成立した算賀（さんが）と朝覲行幸（ちょうきんぎょうこう）について基礎的な考察を行った。音楽・芸能の奏上を含めた儀礼の概要を把握した上で、長寿の祝いである算賀では、天皇の場合のみ雅楽寮が奏楽を担当したこと、一方で年頭に上皇邸などへ行幸する朝覲では儀礼中の奏楽規定がないことを指摘した。原理的に主従関係にはない天皇と上皇の立場に鑑み、君臣関係の表象たり得ない儀礼では公的な奏楽機関が関与しな

いと結論に至った。

◆関連する執筆

- * 2025. 3 『音楽でつながる：日本とアジア・都市と周縁・近世と近現代』（ISBN:978427611023）塚原康子先生東京藝術大学退任記念論文編集委員会編、音楽之友社、東京、担当部分「算賀と朝覲行幸における奏楽：平安前期の記録類から」（338-55頁）

◆関連する口頭発表

- * 2024. 8. "A comparative study of female performers in ancient Japanese and Chinese courts", 8th Symposium of the ICTMD (International Council for Traditions of Music and Dance) Study Group on Musics of East Asia (MEA), 大阪
- * 2024. 10 「平安貴族社会における船楽」、第14回日中音楽比較国際シンポジウム、京都
- * 2024. 11 「算賀と朝覲行幸における奏楽：平安時代初期を中心に」、東洋音楽学会 75 回大会、東京
- * 2025. 1 "Music on the water and performance in imperial space: Distinction and discrimination by social class from an analysis of music scenes in ancient Japanese court diaries", the 48th ICTMD World Conference、ウェリントン

◆関連する研究助成

- * 日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究 C 「日本古代の音楽・芸能を社会的脈絡から探る：日中比較と儀礼研究の視点から」、課題番号 22K00146、2022 年 4 月～ 25 年 3 月、研究代表者

◆関連する受賞

- * 2024.4 第36回ミュージックペンクラブ音楽賞（クラシック、研究評論・出版部門）（単著『古代日本の儀礼と音楽・芸能：場の論理から奏楽の脈絡を読む』による）
- * 2024.11 東洋音楽学会第 41 回田邊尚雄賞（同上書による）

福本 康之「近現代日本仏教界における聲明と仏教洋楽の関係と変化とについて」

【2024 年度進捗】

筆者の研究は、仏教界における洋楽受容の実態についてのものである。そのなかで 2024 年度は、前年度までの調査・研究を踏まえ、聲明と仏教洋楽の関係とそれらの相互作用に基づく変化とについての調査・研究を継続した。具体的には、洋楽をベースとした仏教界の音楽そのもののについての体系的な研究を踏まえ、関連領域である聲明（音楽的異文化）や賛美歌（宗教的異文化）といった、異なるジャンルの宗教音楽との関係から、仏教洋楽の受容について読み解くこ

とを目的とした。4年目の当該年も、まずは過去の3力年に続き、洋楽の受容が盛んである浄土系教団（浄土宗および真宗十派）の声明側の資料（声明集およびなどの宗教専門誌）の調査・収集を継続的にを行い、資料の蓄積つとめた。これらに関しては、教団の公的な刊行物に加え、いわゆる私家版に分類される資料も、若干ではあるが入手することができた。とくに葬送儀礼で用いられる声明に関しては、資料についてこそ新たな発見等には至らなかったが、その前段階として、俗に「地方節」と呼ばれる（それらは特に葬儀などの場面で地方ごとに見られるもので、声明本に掲載の譜との関連性が伺える）ものについて、聞き取り調査から、声明の具体的な状況や資料所在の可能性についてなどの情報を得ることができた。以上、当該年度の調査からは、さらなる資料調査の可能性を見出すことができた。この点については、地道ではあるが綿密な調査を継続したいと考える。

◆原稿執筆

- *《音楽礼拝—正信念仏偈による》の解説執筆（『めぐみ』266号、2024年3月、浄土真宗本願寺派仏教婦人会総連盟）

◆演奏会企画・制作・指導等

- *築地本願寺ランチタイム・コンサート〔企画・監修・演出・解説担当〕（毎月最終金曜日、全12回）
- *浄土真宗本願寺派兵庫教区宗門関係学校吹奏楽合同講習会〔企画・監修・指導等担当〕（2024年8月21日、本願寺神戸別院）

◆仏教讃歌の作・編曲

- *《人は去っても》（歌詞：中西智海）

◆その他

- *龍谷大学文学部特別講義「仏教音楽」ゲスト講師
- *浄土真宗本願寺派「仏教讃歌合唱講習会」講師
- *浄土真宗本願寺派教師教修「仏教音楽」講師

毛利 真人

2024年度の研究課題：

サントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」2023年度採択課題としてレコード袋（スリーブ／エンヴェロープ）の分析を基礎とした戦前日本のレコード産業史及び商業史研究を行なう。数年次にわたる研究計画の第一段として関西及び名古屋の地域レーベ

ルを対象とし、九州大学総合研究博物館に所蔵されている田村悟史コレクションに含まれるレコード袋の整理分類を行なった。また本研究課題の基礎資料として日本のレコード会社表を作成した。

6月2日に行なわれた歴史的音源所蔵機関ネットワークの公開研究会「大正昭和の音とレーベル—関西と名古屋のレコード産業—」及び10月5日に開催された文化資源学会の特別研究会に於いて関西と名古屋のレーベルのレコード袋について口頭で発表を行なう。11月29日～12月1日にボン大学で開催された国際ワークショップでは研究課題を敷衍して、レコード周辺資料の基礎研究の必要性について発表した。この研究課題は「レコード学」構築の一部を為すもので、同ワークショップでは併せて「レコード学への提言」を発表した。

2024年度の研究発表活動

6月2日 公開研究会「大正昭和の音とレーベル—関西と名古屋のレコード産業—」（主催：歴史的音源所蔵機関ネットワーク / 共催：東洋音楽学会西日本支部 / 於：京都市立芸術大学 伝音セミナー ルーム）

9月28日 特別講義「大衆演劇の世界」（立教大学 異文化コミュニケーション学部）

10月5日 特別研究会「シン・文化資源としてのSPレコード」講演「SPレコードをよむ」「パクリレコードをきく」（文化資源学会 / 於：東京大学法文2号館）

11月29, 30日、12月1日 国際ワークショップ「日本研究の補助学としてのレコード学の確立に向けて」（ボン大学 片岡コレクション研究会）

2024年度の著述と発表物

3月 毛利真人・太久保真利子「AK盤の成立過程とラジオ放送での運用について—ディスコグラフィを基幹とした考察—」『九州大学総合研究博物館研究報告 第21号』

8月 CDアルバム「ニッポン・スウィングタイム Vol.2」ビクターエンタテインメント株式会社